# 第50巻記念号発刊に寄せて

須谷医院　院長　須　谷　生　男

第50巻記念号発刊おめでとうございます．私は昭和42年に鳥取大学を卒業し，45年４月から63年12月までの18年あまりを外科に勤務いたしました．私を採用して下さいました手島院長，及び私の外科医としてのキャリアを築いてくださいました当時の外科部長（後の院長）・杉浦純宦先生，副部長・小林真佐夫先生にあらためて感謝申し上げます．

当時の医師数は40名足らずの小所帯でありましたが，その分和やかでありました．医局会での決定が病院の方針にも反映されていましたし，泊まり掛けでの忘年会などで懇親を深めていました．病棟との花見，海水浴，忘年会などの楽しい想い出も沢山あります．今市小学校のグランドを借りての病院全体の運動会や，市営球場での医局・医療職・事務職の三職対抗野球大会などもありました．院内の卓球大会，バレーボール大会などもあり，職員のおおよそが顔なじみでありました．

50年には島根医科大学が開設されました．その頃の県中は第１次救急から３次救急までを担っていて，救急待機６科という制度がありました．小児科・内科・外科・産婦人科・整形外科・脳外科の６科では当直医からの呼び出しに備えて当番が待機しているというものです．当時は国道９号線での交通事故が多く，整形外科，脳外科の呼び出しが多くありました．

昭和47年，58年の豪雨災害の際にはいずれも災害救護班として出動しました．当時はまだDMATはなく，県立病院である当院がまず出かけ，その後を松江日赤の救護斑に引き継いでいました．47年の際は乙原小学校に，58年には三保三隅町役場に行きました．いずれもまだボランティアなどはなく，またスマホなどもないため大変苦労しておられました．60代の女の方で「あなた方は偉い先生方でしょうが，帰られたらまた元の生活をされるでしょう．私らはまだまだ後片付けで大変だ」と繰り返し言われていた方が，翌日神妙な顔つきで「昨夜久しぶりに風呂に入ったら気持ちがうんと楽になりました．昨日は大変失礼なことを言いました」と謝りに来られました．被災者の心のケア，入浴がもたらす心身共の癒やしの大事なことがよく分かりました．

記憶をたどり当時の思い出を記してみました．稿を終えるにあたり当医学雑誌が今後ますます発展されますことを祈念いたします．